

次郎とまりは朝番組を見ながら朝食を摂っている。アジの干物を半分程度食した所で、まりが話し出した。モグモグ・・・口ん中が満杯だ、言葉になっていない。

「おいまり、小生は速く喋れと急かせてはおらんぞ、口の中を空っぽにして喋ったら」

「ねー次郎、一連の事件の鍵は何処にあるとみている、私は東京ー函館ー釧路、順は違ってもその三か所にあると思うんだが、次郎は」

「その三か所かー、いいとこ突くなー、小生はなー、大元は東京と見ている、そんな中でも東都地検が有力だ」

「次郎が、そう想っているなら間違いないでしょう」

食事しながらの二人の会話は、些か捜査一課の会話の様だ。

「麻薬も悪徳弁護士も悪徳建設業者もだが、東都地検いや、地検秘書室が、発端と言っても過言でない。小生はそう想っている」

「だったら秘書室を搜索してみては」

「秘書室職員の銃殺と釧路空港の毒殺、二つの接点は今の所見当たらん、が室長の村井瑠璃子と、バイヤー大里麻衣は二人とも渋谷は大屋隆雄のアパートの卒業生だ。もう一つある、銃殺された菊田健斗と村井瑠璃子は、同じ東都地検秘書室勤務、それに大里麻衣が加わったらまりは何とす」「その辺に何かありそうだ、次郎はどうする」

「秘書室長は理紗に任せている。退社後、いわゆるプライベートをあたる事にする。何が出て来るかは、今の小生には見当もつかん、出て来た時はそんな時で皆で対応して行く」

「秘書室長との出会いは、健斗さんの葬儀の時が初めて、刑事の勘と言うか、この女には何かあると感じとった」

「今までも殺人はあった。これからもチームいづくに、危険があると想われる。止めなさいと言っても止める次郎ではない、だけどこれだけは言わせて下さい、引き下がる勇気も重要です」

と言い、まりはごちそうさま、そして食器を片付け始める。

帳の頃、次郎は東都地検の玄関が見渡せる位置で、缶コーヒーを飲んでいゝる。何処で嗅ぎ付けたかマキが、彼女バージョンで現れた。

「マキ、その恰好は何だ、四月半ばだぞ、そんなペラペラな布を合わせたような洋服じゃー、寒いだろう」

「ご心配なくファッションです、次郎は寒いかもしれんが、自分は寒くはありません」

と言いながら、次郎から暖かい缶コーヒーを受け取った。

「出て来るかな、午前十時から午後六時が勤務時間と聞いている。理紗の話だと部署にもよるが、残業は大掛かりな事案がない限り、定時上がりと聞く」

「今日は花金だ次郎、狙っているんだろ出て来るかな」

「秘書室長だって予定があろう、今日は残業しているんでは」

「もう定刻を三十分過ぎている、今日は無理じゃないの」

「後、十分待ってみよう、出て来なければ今日はよしておこう」

「ねー次郎、このまま帰るの、この近くに美味しい店がいっぱいあると、ま

りさんが言ってたよ」

「マキ、遊びに来たんじゃないぞ」

「かな振だったら寄ってきたらと、まりさんが言ってた」

「う・・・十分待ってそうしよう」

「やったーだから次郎、好きだよ」

十分後二人はひと駅、地下鉄に乗り地下にある、いかにも高級そうな店に入った。二十坪程だろう、そこにはカウンター席とボックス席であつた。満席の様だが、いらつしゃいませこちらへどうぞ、とウェイターさんが、トンボ二つに案内してくれる。バーテンダーさんが次郎とマキを見て、怪訝そうな顔をしている。少し間が開いてバーテンダーは喋りだした。

「お客様はこの店は初めてですね、何処でうちの店をお聞きになりましたか」

「この先に用事があり来ました、早いが帰りに何か飲んでいこう、そんな想い出、寄らせて頂きました」

「地検に所要でも、ここは地検の方が多いです」

次郎とマキはドキツとした。いきなり地検が出て来たから、バーテンダーは、小生等を見抜いたのだろうか、そんな想いがした。

「お客様、そんなに硬くならぬとも、初めてのお客様にはその様に言っております。で、何にいいたしましょうか、それにしてもお客様達はどの様なご関係ですか」

次郎とマキは顔を見合わせる一呼吸後、マキが口を開いた。

「ジジと孫の関係です、自分はマキでジジは次郎、自分は独身でジジは既婚

者、次郎の奥様公認で、こうして飲むのも事も、偶にはあります。今日は所要が早めに完了した、何処かで一杯やっていくかで、こちらの店が見に入っ
た。

「はい、お嬢さん有難うございます、お分かりいたした、何をお作り致しますよう」

「何を作ると言うか、レミーマルタンに氷を落としてください。それを二つ」
「畏まりましたお嬢さん、往年のムービスター裕ちゃんが、好んで飲んで
いたという代物ですね、お待ちください」

出来る間次郎はマキと、七時前と言うのに満杯とは、次郎どう想うとか言
いながら待っていた。

「おまちー」

といかにも高級店らしき声で、カウンターにグラスが二つ置かれた。レミー
マルタンに、氷を落とすだけだろう、注文してから五分とは言わずに出て来
た。又もやマキが口をきいた。

「ありがとう、でもバーテンダーさん、七時と言うのに満席ですね」

「私が言うのも何だが、料金は高級酒の割にはリーズナブルに設定してあり
ます。噂を聞いて席が無くなってはいかん、そんな想いもあり、仕事上が
りに直ぐ、見えるようになりました。おかげさまで、後トンボが二脚あるだけ
す、その代わりと言っては何ですが、午後十時を回る頃には客はまばら、十
時半には閉店です。この辺は官庁街であり、お客さんはお役人も多いし、関
連なる方も多い、お客さん達もその内二人です」

「バーテンダーさんはお話し上手ですね」

とマキが言った。今度は次郎が訪ねた、

「値はリーズナブルと先程言っていたが、誰しもが来れるんですか」

「いや、そうではないです、入庁一、二年から五、六年の方は殆どお見えになりません、見えても上司とご一緒のようです」

「メニューは無くても、その棚に置いてるボトルから伺えますね、つまみ否オードブルは」

「肉類とか、魚介類とか野菜等々、大まかにその時ある材料で、人数分作る様にしています」

「決まったメニューは無いんですね、お客さんは起こりはしませんでしたか」

「年に数件はあります、でもそんな人は二度とうちには来ませんでした、うちの店を理解してくれる人だけで十分です」

「霞が関のお客さんが多いようですが、東都地検の職員の方々はいかがですか」

次郎は聞いた。

「はい来ますよ、でももっと高級店に行かれるようです、先日三人程の若い職員の方がお見えになられ、言っていました。俺達じゃー秘書課が行っている様な、あの様な高級な店は行かれんよな」

と、言っていました。

「じゃーなんだ、秘書課いつも、高級な店ばかり行っているんだろうか」

「お客さん、私には分かり兼ねます」

「お、ごめん、余計なことを訪ねてしまった」

「ご心配なく、お客様とお話するのも仕事のうちです」

「ねー次郎何かつまみとってよ」

「オーごめん、カウンターには何も載っておらん、ウエイターさん魚介類とやらをお願いします」

「畏まりました十分ほどお待ちください、レミーマルタンをお入れしましょうか」

「話に夢中になってしまったお願いします」

「お嬢さんは如何いたします」

「いっぱい入れて、美味しいお酒はいっぱい飲まなくちゃー」

次郎はむっとすれど、直ぐ真顔になりこつくりを二つ。秘書課職員がこの辺の高級店に出入りしている、村井瑠璃子はどこの店に現れるだろうか、高級店は、幾つ位この界限にはあるんだろうか。半ばひそひそ話だ、そんな次郎とマキに気を利かせたか、ウエイターさんはお馴染みさんだろう、他お客と談笑を始めた。

「いいマキ、小生は秘書課員もだが、夜のこの界限での狙いは村井瑠璃子に絞っている」

「次郎は一連の事案に、村井瑠璃子が関わっていると想っているの、何故」「何故と言われても決め手がないが、小生には勘がある、だけど勘と言っても今は心細い糸しかない、接触でもできればそれとなく、情報が手に入るんではと想う」

「お二人さん、あんまり難しい顔をして飲んでないで、これは当店の魚介盛りです、これでも食し、美味しいお酒を飲んで下さい」

と言いながらウエイターさんは、大盛皿置いて行った。次郎はグラスを持

ち、カウンター越しにボトル棚を眺めていた。手持無沙汰なマキが次郎に話しかける。

「ねー次郎何考えているの」

「あつごめん、考え事をしてしまった、グラス空っぽだね頼もう」

次郎はウェイターさんにグラスをかざした。

「丁度グラス2杯で、ボトルが空になりました。それにしても強いですね、二人とはいえ短時間にボトル一本空けるとは、当店では数少ないお客様です」

「上手い酒は時間を忘れさせる、今宵はこれを開けたらお開きにします」

そー言って、ウェイターさんに再びグラスをかざした。頃合いを見計らい次郎は、おあいそを告げる。マキは足んないのか、ふて腐れ気味に地上への会談を上がり始める。

翌日次郎はいつぶくの定位置で、昨日の取材状況を、時折宙を見つめながらPCに打ち込んでいた。

「今日は開店休業かへ」

次郎は厨房のまりに言った。

「昨日、調布署交通課の方が見え、近隣でタタキが三軒あった、搜索や聞き込みで右往左往している。そんなことを言っていた。暫くは深大寺参りのお客様さんだけです。次郎、いいでしょ前に座って」

まりは、コーヒーにケーキを持ってきた。

「今タスキ外すね、どうこれで新婚気分になった」

次郎は複雑な表情を浮かべ一言、

「成ったぞ」とピースサイン。

「次郎、今度の件は目星ついたの、マキちゃんに危ない目に合わせないでね、他のみんなも同じ」

「その辺を考え協力してもらい、行動とってもらっている。目星やが皆無とやら、完璧なんだ。だからこそ崩れ始めれば、とんとん拍子に事が始まるのでは、その突破口を探しているんだ」

「狙いはつけた」

まりが言った。

「皆は口には出さんが、其々に行動している、てな訳で吉報を待っている。今までの皆の聞き込みやら、情報収集を考慮すると、東都地検は秘書室が匂う、小生はそこいら辺から攻める、小生の中には、秘書室長の村井瑠璃子は真っ黒だ。函館での健斗さんの射殺現場、ダイニングメッセージらしきアルファベットのtの字と、漢数字の三と、その下に小さく字にならないグシヤグシヤは、これらはtはカタカナのヒである、漢数字の三はカタカナのシで、三番目の小さいグシヤグシヤはカタカナの小さいヨでは、健斗さんは至近距離からの射殺だ、顔見知りの犯行ではなかったのか、ダイニングメッセージはヒシヨを指している、とするとヒシヨ即ち村井瑠璃子を指すのでは」

「だったら直ぐ逮捕すればいいと思うが」

「まりは平和その者だね、小生の推理だけでは逮捕できん、確かなる証拠がなければ無理だよ、それに秘書室全員がヒシヨだからね、誰を指すかは分かっていない」

「ねー、私にも教えてよ今後の捜査方針を」

「小生流とでも言っとくか、皆が其々に動いてくれている、小生一人だけで

はどうにもならん、皆の意見を聞いて判断す。目下の所は村井瑠璃子を追う」

「その村井瑠璃子とやらは女性でもあるし若くして、秘書室長に抜擢された、やり手なんでは」

と、まりが言った。

「やり手こそボロは出しやすい、彼女の私生活を追ってみる、日中は東都地検内では職員を顎で使い、書類は一目見れば適格に処理し、計算は電卓要らず、暗算で計算は済ませる。唯一難点といえは酒と男にだらしないようだ」

「次郎だってそうじゃーないの」

「同じ穴のムジナと言われちゃー面目ねーがな」

「これ以上昼間っから突込みは止めておこつと」

と言いまりは厨房に戻った。

次郎はスマホをプッシュし始める。函館南署ですと返事が返ってきた。

「東京の谷端次郎です、片岡さん否警部補片岡さんです、お手すきでしたらお願いします」

「今、席を外しております。戻りました電話する様に言いましょう、電話番号をお願いします」

次郎はいっぷくの番号を言い、先様が確認するのを待ってスマホを切った。座りづめだった次郎、外に行き背伸びをしてみると、まりに言い出て行く、木々は新緑に溢れ春爛漫だ。人々は軽装となり、女性は肌の露出が多くなった。参道では参拝客だろう談笑しながら、行き来してる。片岡さんから電話

ですよの声で、次郎は手を挙げ内に入って来る。ありがたいとまりに礼を言
い席に戻った。

「次郎さんご無沙汰しています。俺だ俺だよ函館南署の片岡です」

「警部補さんこちらこそ、ご無沙汰ばかりで、でもその声を聴いた限り息災
のようで何よりです」

「一昨日、管内で半グレによるタタキがあった、その後始末をしている所で
す」

「アイヤー忙しい所電話してしまった、後ほど掛け直します」

「次郎さんそれには及ばぬ、略、解決済みだし山崎巡査長に後は頼んだ、そ
れより何か重要事でもあるのと違うかへ」

「忙しかったら後にしてもいいんだが」

「それには及ばぬ、他ならぬ次郎さんからの電話だ、部下も心得ている」

「恐縮します」

「鬼の警部と言われた次郎さん、こっちこそ恐縮しています。で、何か用事
があつたんでは」

「住吉漁港の射殺事は件進展はあつたか、喋れる範囲でいいんだが」

「喋れるも喋れないも、次郎さんなら何でもＯＫ、でも次郎さん、進展なし
とでも言っておこうか」

「手掛かりはなし、そう言いたいのか」

「そうです、今以って被疑者はどっから来て何処へ消えたか、見当もつか
ないのが現状です。チラシや張り紙をし、多く呼びかけているんだがヒットしな
い。住吉漁港は日が落ちれば、人通りはたと止まり、静まり返る。又、漁

船が出入りしたとしても極普通のこと、誰も怪しんだりはいしない。当日は目撃情報はない、あったとしてもさつきも言ったように、怪しんだりはいしない」

「警部、言葉を返すようだが船の出入りはあったが、誰も見ていないだけでは」

「署内一丸となって聞き込んだんだが、無念な結果でした」

「警部、小生流に言えば、目撃情報が無いだけで実際に、船の出入りはあった、と想ったらどうなるだろう、被疑者は船で来て射殺し船で消えた。そんな仮説はどうだろう」

「次郎さん良い所つくなー、現在我々もその線でも捜査中、ダイニングメッセージはカタカナでヒシヨと読むのではと、捜査会議でそう話す捜査官も出てきた。それが現状といったところだ、がヒシヨと言えば射殺された菊田健斗さんも、東都地検秘書室勤務、ヒシヨは秘書ならばダイニングメッセージは、東都地検秘書室或いは秘書室内の特定の秘書を指すんでは、だけど相手は東都地検、やたらと手が出せん状況です」

「小生もそんな事を想っている、あのダイニングメッセージはヒシヨで正解だな、でも警部、無茶はせんように相手は東都地検だ」

「次郎さんはどうするんだ」

「小生だって、無暗に東都地検と喧嘩はせんよ、だけど真相究明には手加減は致さん」

「鬼の警部出陣だ」

「片岡警部補おだてんでな、いざという時は援軍宜しく」

がってんと、片岡警部補は威勢のいい返事を返して来た。

次郎が言い出した。

「無論とは思うが、今小生が述べた事、片岡警部補が言った事は署内に留めておいてくれ、なんせ相手が相手だけに、どこから横槍が突っ込んでくるともわからん、極秘で捜査をお願いしたい」

「で、鬼警部これからの捜査方針は」

「小生も、どう攻め込んだらベターか迷いがある所です」

少し間が相手次郎は話し出した。

「小生らには銃殺された健斗さんの奥さん、理沙さんがいる。彼女は現在も東都地検の職員だし、健斗さんの無念を晴らすと息巻いている。無理と危険は弁え協力を、お願いした」

「次郎さんは、いいよな協力者が大勢いて、俺なんか一人もいない、ヘマやらかせば大目玉が関の山」

「そうじゃーないよ、大目玉食らったっていいじゃん、正しいと想ったら進めばいいんだ、部下にもそう言えばいいんだ」

「しかし間違いは部下にあらず警部補にあり、そんな時の失敗は俺が持つ皆は思う存分捜査してくれ、そうすりゃー自ずとして部下は付いてきてくれる。

山崎巡查長だってその一人だよ、失敗は他に非ず自分にありで行こう」

次郎は理紗に向き直り言い始める。

「理紗いいか良く効くんだ、前にも言ったと想う、危険を冒してまでやんなくたっていい、自分には無理と分かったなら直ぐ降りても構わん、分かった

な」

四人の沈黙が続いた。

「イヤー遅くなっちゃった、すまん」

と言いながらケンジが入って来た。場違いな雰囲気、ケンジは躊躇した、キイツと口を結んでいた理紗が話始めた。

「自分はチームいっぶくの一員です、健斗の妻でもありました。健斗の真相究明に努めてまいります、よってここで降りる様な事はない。今迄話したのが今回の調査内容です、明日からどうすればいい、次郎さん」

理紗の決意染みた言葉に、次郎は戸惑いを見せた。

「理紗、分かった宜しく頼むぞ、で、皆にも言って置く個人プレーは許さん、必ず複数人以上で行動する事、やむを得ず一人行動もある筈、その場合には逐一、誰でもいいから連絡をするように、マキとカナ分かったな」

いきなり振って来たんで、二人は慌てる。

「これからの捜査方針を話そう、地検内での村井室長の動きと、その筋の人と想われる室長の訪問者、退庁後の村井室長の行動と三月に休暇を取った日にちと、分かれば行った先、地検内は理紗に任せるしかないだろう理紗頼んだぞ」

「あいよ」と理紗が返事した。

「理紗、その返事はなんだね、時代劇の岡っ引き風な返事」とケンジが聞いた。

「黄門様番組の、見過ぎと言われています、お銀風に答えただけです」と理紗が答えた。

「そんじゃーお銀、そっちの方は頼んだぞ」

と次郎が言う。

「退庁後の行動は、小生を含め残りの四人で担当しよう。明日から宜しくなそれと本業は疎かにしていかんぞ、飲み始めて2時間になるな、小生の時間は終わった、チヨウさんに頼んである後は皆で楽しくやってくれ」

と次郎は言い席をたった。

それから一週間が何もなくつ経った。次郎は朝参から帰り、干物にアサリの味噌汁で朝食を摂っていた。ルパン三世が喚いた。

「おい、浩二どうしたこんなに朝早くから、いつもは寝ている時間だと言っていたが」

「まだ公にはしてはいないんだが、六本木ビルのオーナー大屋隆雄、彼は国会議員と繋がるがある。民友党の北畠厚生労働大臣はこのビルに秘密裏に訪れている」

「民友党の北畠議員と言えば、厚生労働大臣でもあり時期の総裁候補と噂されている、その北畠議員が何故に来ているのか」

「まだそこまでは掴んでいないが何かある、そう想っている」

「うー秘密裏が平成では気になる所、まだ各社には知られていない、今朝の朝会でデスクは力説していた」

「厚生労働大臣が、何故に札付き企業が入居しているこのビルに、次郎さん、俺はとことんやってやるぜ」

と、浩二は生き巻いた。

「ところで浩二どの程度まで調べてあるんだ、そんなに急き込んで電話してきて」

次郎が言う間もなく、

「今日はまりさんのコーヒーとランチが言い」

と電話越しに浩二が喚いた。

「浩二さん喚かなくなつて聞こえているよ、見えたら作ります」

「お願いします」

と言い、浩二は電話を切った。

「まり、すまんはー売り上げとは無関係な客がくるわ」

いつもの事でと、まりは言い朝飯のかたづけを始めた。

次郎はいつぷくの窓際の席で、キーボードを叩いている。チュワーツと挨拶らしき声を発し、浩二が入って来た。厨房でまりがあそこと顔を向け戻した。

「5分待ってくれないか、今までの流れをP Cに打ち込んでいる所だ、コーヒー飲んで待っててくれ」

「まりさんのコーヒーが有れば、いつ迄でも待っています」

次郎は苦笑いしP Cと相対した。数分後次郎は、お待ちどう様と浩二に声を掛ける。どっから話すかなと次郎を見た。北畠厚生労働大臣からがいいだろうな、と浩二はボソボソと言った。

「美味しい仕事は優先的に昭和建設に回し、選挙時は票集めを頼む、不動産売買ルートも優遇され、強引な立ち退きは見て見ぬふりをしている。泣寝入も数多に及んでいるけど、犯罪すれすれのところで事に及んでいる。確

認中なれど年に数回、億単位で北畠厚生労働大臣に、現金が渡っている。三階の弁護士事務所、これも厄介と言うか、×事件でも○にし仕舞う凄腕弁護士、と言うと聞こえがいいが裏を返せば、チョーが付く悪徳弁護士、これも北畠厚生労働大臣が関与していると言う」

浩二の、想わぬ話の展開に次郎は、言葉を忘れ聞き入っていた。そろそろ本丸に行こうかの浩二の弁に、次郎の目が留まっていた。

「次郎さんの眼が速く話せと言っているようだ」

と浩二は言ってカバンから茶封筒を取り出しす、束ねたA4紙を一部次郎の前に置いた。

「一ページ目を見てくれ」

「おい、浩二麻薬取引と記してある」

「はい麻薬です、主に覚せい剤と大麻で輸入とその販売だ」

「昭和建設、いやあの六本木ビル全階が関係していると言っても過言でない、週刊平成ではそう掴み、裏を取り始めた。マトリさんだって、大掛かりな取引情報を手に入れても金振り、掛かっても雑魚ばっか、マトリさんもしよげっぱなし、なれど体制を立て直し極秘捜査に徹す。でも週刊平成はそんなマトリさん情報を手に入れた。次郎さんなんだと想う」

「おいおい浩二、小生に謎解きをさせる気か」

「あついや、次郎さんゴメン、ここは他と違いつい口が軽くなってしまふ」

コーヒーで喉を潤し、一呼吸してからと次郎は浩二に言った。

「次郎さんあの六本木ビルは、大掛かりな麻薬取引と販売の中枢だ。なれどしつぽを出さん、情報漏れと言うか計り知れない機関が動き、手入れを逃れ

ている。例えば東都地検秘書室の職員、菊田健斗さん、彼も知る過ぎた為に銃殺されたか」

「じゃー浩二は東都地検に、情報提供者がいると言うのか」

「そこまでは言わんが、言いたくもなるよな、健斗さんは誰によって何の為に銃殺されたか、未だ真相は闇の中、次郎さんそうだろう、東都地検に何もないんだろうか、週刊平成はあると睨んだ」

浩二の捜査情報に次郎の形相がかわった。・・・一呼吸おいて次郎が喋りだした。

「浩二、今言った事は小生以外には喋らんでくれ、無論理紗にもな、頼んだぞ、皆には必要があれば小生が話す。相手が東都地検では平民が行っても相手にはされないのがおち、が幸いにしてチームいっぽくには強い味方がいる、目下の所、理紗を上手く使うしかない、週刊平成は正面からぶつかるんだよな」

「うちの取材方法は内密、でも次郎さんの所はこの限りでない、その代わりと言ったらなんじゃが、いっぽくで掴んだ情報は俺に流して下さい」

と言った。浩二は言い終わると次郎の顔をそつと見、言い始める。

「釧路空港で、薬害された小金井市の主婦大里麻衣、彼女だって末端のバィヤーとしか分かっていない、所轄の捜査ではそれ以上は無理、今回は、ならかの情報漏れを防ぐ意味で、消されたと思われる、函館の菊田健斗銃殺も、そうとしか想えない。東都地検は真っ黒としか想えん」

「相手が相手だけに横槍もあろうが、週刊平成は想定内か」

「一部では横槍を想定して、部署替えを希望も出てきている」

「浩二はどうなんだい」

「俺は突き進むのみ」

「偉い政治家や、おっかない人が出てきてもかい」

「次郎さん俺は文屋だ、書くのをやめたら俺は終わりや、俺に文屋を辞めろとでもいうのか」

厨房で、お昼を作りながら成り行きを見ていたまりが、お昼ですよと特性ランチを運んできた。

「二人ともあんまり難しい顔をしないで、ビックサンドを食べてて、今コーヒー淹れてきます」

とまりは言い厨房に戻った。二人とも胃に物が入り落ち着いたか雑談を始める。浩二はコーヒーを二口喉に流すと、ボソボソツと喋りだした。

「次郎さん、社内では悪徳不動産も麻薬も闇献金も、皆其々に興味があると思う、と言ったところで俺は東都地検に的を絞った。なぜかと言われれば説明できんが」

と言ったところで浩二は次郎を見た。

「理紗は貸さんぞ、又利用する事も断るぞ」

「次郎さん最もです、当初から理紗さんを利用する考えはない、ご心配なく」

「それなら良しとするが、彼女はここん所で要約本来の彼女に戻った。愛する健斗さんの銃殺真相究明に乗り出した、チームいっぷくにこころよ良く協力してくれている、そんな理紗にちよっかいは出さんといてくれ」

「はい、分かりましたでも次郎さん、情報交換お願いしますよ」

「それは小生からもお願いします」

「次郎さん等は、どこまで掴んでいるのか、今後の捜査方針をお聞かせ下さい。全部とは言わんが辺り程度でも」

次郎は躊躇したが相手は大手企業だ、承諾し今までの事をかいつまんで話した。

「さすがは次郎さんだ、よーそこまで調べましたね、シャブ等は我々より調べ上げている、でも次郎さん、これからはこのままじゃーすまんよ、チームいっぷくを追い越してやるぜ」

「浩二達はどっから攻めていくつもりなんだ」

浩二は、待ってましたとばかりに話し始めた。

「週刊平成は、其々にチームを組んだ。第一に六本木ビル、第二に麻薬、釧路空港毒殺事件と漁船岸壁激突炎上事件、第三に函館港銃殺事件及び東都地検秘書室、に分散して取材を進める事にした」

浩二はどのグループに手を挙げたんだと次郎は聞いた。浩二は第三と答えた、次郎は如何様にと問いた。

「被疑者はどっから来てどこへ消えたか、ダイニングメッセージらしき砂に記されている、カタカナらしき二文字、推理小説フアンの俺にはもってこいだ。殺害された健斗さん所属の秘書室も気になる、室長の村井瑠璃子だ。

六本木ビルのオーナーでもあるし、渋谷にお屋敷を構え、善意と称し邸宅脇にアパートを持ち家出少女を住まわしている、成績優秀者には、大学を出させ職業斡旋もしている。ここ迄は善意者なれど、皆六本木ビルの会社に就職させている、どんなコネがあるか不明だが、東都地検にも二人就職斡旋して

いる。一人は銃殺された健斗さんの奥さん、あと一人は秘書室長の村井瑠璃子だ。菊田理紗は次郎さんも良くご存じの如く何ら問題はない、問題は室長の方だ」

次郎は腕組みをしながら、浩二の話を時には黒目を大きくさせ聞き入る。「地検内では室長職を熟している、がプライベートは誰にも分らん事ばかり、分かっているのは週末に六本木の高級クラブへお出まし、スタイル抜群で美貌の持ち主だ。男が放って置く筈がない、一年前だったかな行きずりの男としけこみ、週刊誌をにぎわした事も、秘書室ではテキパキと仕事を熟すが、酒と男にはだらしない面もある様だ。次郎さん如何だい、その辺から近づき情報を探るのも、我が社では近日中に行くようなことを言っていた、しかしチョウが付く程その店は高いらしい、二の足を踏んでいるようだ。次郎さん、渋谷大屋隆雄のアパートの出だ、これだけでも何か匂う、行って合う価値はある、健斗さんの上司、直接では構えられてしまう、次郎さん流に探ってみては、あわよくば・・・」

「小生にはまりがいる、そこまで考えはない、だけど浩二が言ったように高級クラブで、美人と高級酒を傾けるのは悪くはない、言いてみるとするか、でもいつも其の店とは限らんだろう」

「何軒かある様だ、確かさを望むなら退け時に地検出口で網を張るのも、なんならその役俺が引き受けても」

次郎はそれには及ばぬ、こっちでやると浩二を制した。

「次郎さん達は、いよな皆で協力し合い事件を解決しようとしている、俺達は自分以外に仲間はいない、周りは皆敵だ、そんな中での取材、次郎さんも

分かるだろうな俺の苦勞を」

「わかったよ浩二、捜査に影響無きと判断したときは情報を流す、それでいいだろう」

それで気を良くしたか浩二は、又喋りだした。

「次郎さん俺は、函館の銃殺事件からとつか勝手みる。暗号めいた砂に記されたカタカナ文字のようなのも気になる」

「アルファベットのTと漢数字の三のような、小生も気になっている所だ、浩二頼んだぞ」

「次郎さん頼みでは放っておけん、早速、出張費をディスクに要請してみます」

次郎とまりは、朝番を觀ながら朝食を摂っている。干物を半分程度食した所でまりが話し出した、モグモグ・・・口ん中が満杯だ、言葉になっていない。

「おいまり、小生は速く喋れと急かせてはおらんぞ、口の中を空っぽにして喋ったら」

「ねー次郎、一連の事件は何処にあるとみている、私は東京ー函館ー釧路、順は違ってもその三か所にあると想うんだが、次郎は」

「その三か所かー、いいところ突くなー、小生はなー元は東京と見ている、そん中でも東都地検が有力だ」

「次郎がそう想っているなら間違いない」

と、まりが言った。食事しながらの二人の会話は、些か捜査一課の会話の様だ。

「麻薬も悪徳弁護士も悪徳建設業者もだが、東都地検いや、地検秘書室が発端と言っても過言でない。小生はそう想っている」

「だったら秘書室を搜索してみては」

「秘書室職員の銃殺と釧路空港の毒殺、二つの接点は今の所見当たらん、が室長の村井瑠璃子とバイヤー大里麻衣は二人とも渋谷は大屋隆雄のアパートの卒業生だ。もう一つある、銃殺された菊田健斗と村井瑠璃子は、同じ東都地検秘書室勤務だ、それに大里麻衣が加わったらまりは何とす」

「その辺に何かありそうだ次郎はどうする」

「地検内での秘書室長は理紗に任せる、退社後いわゆるプライベートをあたることにする。何が出て来るかは今の小生には見当もつかん、出て来た時は、そんな時で皆で対応して行く」

「秘書室長との出会いは健斗さんの葬儀の時が初めて、刑事の勘と言うか、この女には何かあると感じとった」

「今までも殺人はあった、これからもチームいっぷくに、危険があるとも想われる。止めなさいと言っても止める次郎ではない、だけどこれだけは言わせて下さい、引き下がる勇氣も 重要です」と言いまりはごちそうさまと言い食器を片付け始める。帳の頃次郎は東都地検の玄関が見渡せる位置で、缶コーヒーを飲んでいる。何処で嗅ぎ付けたかマキが彼女バージョンで現れた。

「マキ、その恰好は何だい、四月半ばだぞ、そんなペラペアな布を合わせたような洋服じゃー、寒いだろう」

「ご心配なくファッションです、次郎は寒いかもしれんが自分は寒くはありません」

と言いながら次郎から暖かい缶コーヒーを受け取った。

「出て来るかな、午前十時から午後六時が勤務時間と聞いている、理紗の話だと部署にもよるが、残業は大掛かりな事案がない限り、定時上がりで聞く」

「今日は花金だ次郎、狙っているんだろ、出て来るかな」

「秘書室長だって予定あろう、今日は残業しているんでは」

「もう定刻を三十分過ぎている、今日は無理じゃーないの」

「後、十分待ってみよう、出て来なければ今日はよしておこう」

「ねー次郎、このまま帰るの、この近くに美味しい店がいっぱいあるとまりさんが言ってたよ」

「マキ、遊びに来たんじゃないぞ」

「金振だったら寄ってきたらと、まりさんが言ってた」

「う・・・十分待ってそうしよう」

「やったーだから次郎、好きだよ」

十分後二人は、ひと駅地下鉄に乗り、地階にあるいかにも高級そうな店に入った。二十坪程だろう、そこにはカウンター席とボックス席であつた。満席の様だが、いらつしやいませこちらへどうぞ、とウェイターさんがトンボ二つに案内してくれる。バーテンダーさんが次郎とマキを見、怪訝そうな顔をしている、少し間が開いてバーテンダーは喋りだした。

「お客様はこの店初めてですね、何処でうちの店をお聞きになりましたか」

「この先に用事がありました、早いが帰りに何か飲んでいこう、そんな想いで寄らせて頂きました」

「地検に所要でも、ここは地検の方が多いです」

次郎とマキはドキツとし、顔を見合わせた。いきなり地検が出て来たから、バーテンダーは、小生等を見抜いたのだろうかそんな想いがした。

「お客様そんなに硬くならぬとも、初めてのお客様にはその様に言っております、で、何にいたしましたでしょうか、それにしてもお客様はどの様なご関係ですか」

次郎とマキは又もや、顔を見合わせる一呼吸後、マキが口を開いた。

「ジジと孫の関係です、自分はマキでジジは次郎、自分は独身でジジは既婚者、次郎の奥様公認でこうして飲むのも偶にはです。

今日は所要が早めに完了した、何処かで一杯やっていくかでこの店が見に入った。

「はい、お嬢さん有難うございます、お分かりいたしました、何をお作り致しますしょう」

「何を作ると言うか、レミーマルタンに氷を落としてください、それを二つお願い」

「畏まりましたお嬢さん、往年のムービスター裕ちゃんが、好んで飲んでい たという代物ですね、お待ちください」

出来る間次郎はマキと、七時前と言うのに満杯とは、次郎どう想うとか言 いながら待っていた。

「おまちー」

といかにも高級店らしき声でカウンターにグラスが二つ置かれた。レミーマルタンに氷を落とすだけだろう、注文してから五分とは言わずに出て来た。又

もやマキが口をきいた。

「ありがとう、でもバーテンダーさん、七時と言うのに満席ですね」

「私が言うのも何だが、料金は高級酒の割にはリーズナブルに設定してあります。噂を聞いて席が無くなつてはいかん、そんな想いもあり仕事上がりに、直ぐ見えるようになりました。おかげさまで後トンボが二脚あるだけです、その代わりと言っては何ですが、午後十時を回る頃には客はまばら、十時半には閉店です」

この辺は官庁街であり、お客さんはお役人も多いし関連なる方も多い、お客さん達もその内二人です」

「バーテンダーさんはお話し上手ですね」

とマキが言った、今度は次郎が訪ねた。

「値はリーズナブルと先程言っていたが、誰しもが来れるんですか」

「いや、そうではないです、入庁一、二年から五、六年の方は殆どお見えになりません、見えても上司とご一緒のようです」

「メニューは無くても、その棚に置いてるボトルから伺えますね、つまみ否オードブルは」

「肉類と魚介類と野菜等々、大まかにその時ある材料で、人数分作る様にしています」

「決まったメニューは無いんですね、お客さんは起こりはしませんでしたか」

「年に数件あったかな、でもそんな人は二度とうちには来ませんでした、うちの店を理解してくれる人だけ十分です」

「霞が関のお客さんが多いようですが、東都地検の職員の方々はいかがです

か」

次郎は聞いた。

「はい来ますよ、でももつと高級店に行かれるようです、先日三人程の若い職員の方がお見えになられ言っていました。俺達じゃー秘書課が行っている様なあの高級な店は行かれんよなと」

来週の花金にそれは訪れた。週刊平成早乙女浩二から電話が入った。

「次郎さん浩二です、ニュースで見つけたぞ、あの村井瑠璃子が赤坂の高級店へ入ったよ」

「おーい、浩二赤坂でずーっと張ってたのか」

「店は無理だ、地検前で退庁時を狙ったんだ、そうしたら今日出て来たんだ」

「悟られなかったかい」

「次郎さん、俺を誰だと思っているんだ平成の浩二だ、抜かりはない」「分かった、そこなら一時間かからんだろう、小生が行くまでそこで時間を潰していてくれ、なんだったら高級酒でも飲んでいては」

「次郎さん持ちなら構わんが」

「足元を見やがって程々でな、程々でなマキに見つかたら大変やで、俺が行ったら、伝票はウェイターさんに預けてる。それと小生には接触なく出るように、一時間経ったら小生に急用だと電話を入れてくれ」

「了解」と言って浩二は電話を切った。

アラフォーの女性は高級酒をロックで、トンボに腰掛けてやっている。手持ちぶさなのか、天井を見上げたり壁棚の洋酒を眺めたり、辺りをキョロついて

いる。次郎はドアを押した、高級店だけあつて内装は豪華さが感ずる、中程の右手で浩二が手招きしている、次郎も右手を挙げその席に、他に分からん様に二言三言言葉を交わす。次郎は浩二と確認事を交わし、カウンター席に向かった。次郎は村井瑠璃子のトンボの脇に歩を進め言った。カウンター席は、他に空いているが次郎は敢て、村井瑠璃子の隣席に行き、「こちら宜しいでしょうか」

と言った。次郎は、他にも席はありますよと言われるのを覚悟で、言ってみた。村井瑠璃子はちよつと横見し、一口水割りを口にし、

「空いていますどうぞ」

と言った。

次郎はウェイターさんに、レミーマルタンの水割りをお願いした。

「谷端次郎です、通称ジロウです」

と、次郎は言った。

「私は瑠璃子、ルリタテハのように綺麗で、誰にでも好まれるようにと親が付けた言っていました。通称ルリです」

と二人は自己紹介しグラスをカチンさせた。アラフォーと思しきルリは故意なのだろうか、ジャケットを着、膝上のタイトスカートを着用している。立っている時は気が付かんが、トンボに腰かけると大腿部辺りまで裾が上がり、色気を一層誘う。

「飲み始めて一時間になります、失礼な言葉使いや失礼な行動があつたら御免なさい」

とルリは言い肩を寄せて来た。

「お酒強いのでしょ」

リルは言いウエイターに、レミーマルタンのお代わりを告げた。

「あ・私もレミーマルタン頂こうかな、それに乾きもんもお願い」

「ねーえ、私は公務員、次郎さんどんな仕事やってんの」

「私も公務員でした」

「と言うと今は」

「リタイア組です」

「今は悠々自適暮らしですね」

「とは言い難いが、自分の飲み代位の蓄えは用意しています。そこまで上さ
んに出してもらっては、些か」

「私は仕事柄、気が張ったまま一日が終わってしまう、そんな時息抜きが必
要、こうして好きなお酒を飲みに来るんです」

「そんなに気が張る仕事をしているんですか、大変ですね」

「仕事もそうですが、サイドビジネスを抱えています、そっちの方が大変です。
こうしてプラスアルファ頂かん事には、体がいくつあっても足りない」

と言いいリルはお代わりした。

しつかりトンボに腰かけているが明らかに、リルは酔っている。カウンター
越しのボトルケースのガラスに映った顔が語っていた。次郎は聞いてみた。

「大変なサイドビジネスってどんな」

「御免、これ以上は聞かないで、私もリタイア組の谷端次郎としか聞かな
い」

「お・・・ごめん、小生もそれ以上は聞かん事に」

店内は突如照明が落ちた。ブルース調の曲が、そして東京ナイトクラブが掛かった。

「ルリが踊ろうよと、トンボから降りる。次郎の腕を引っ張りフロアに、ルリは次郎の胸に預けた。次郎はリズムに合わせルリをリードす、ジャケットから想像できなかった、胸を合わせ踊っていると、やたらと二つの突起物があたる、胸の大きさが伺われる。踊り終えカウンター席に戻った、トローンとした目でルリが言い出した。

「ねー次郎さん、何処か何時かは別地で出会ったらそんな時はそんな時、ケースバイケースで、今宵リタイアのジロウと公務員のルリ以上は探らない。そんな付き合いをさせて下さい」

次郎は些か動揺してしまった。ルリはそんな次郎を見逃さなかった。「どうしたの私では」

次郎はむにゃむにゃ、声なき声が、内ポケットでルパン三世が喚いた。救われた心境になった。

「今宵はダメと上手く断るんだよ」

ルリが傍らで言い寄った。次郎は客がいない空間を見つけ、ルリに手刀をしその方向に行く、

「浩二遅いぞ、危ない所だったよ助かった。浩二、店の名と彼女の名を教える、その気があればどうぞ、だけど高いぞー、でも小生の知らん情報も数多と想う、掴んだネタ次第では出張費も」

と言いつつ次郎は浩二との電話を切った。

急用が出来たと言いつつ次郎はルリと別れる。

「昨夜は、捜査の一環ではあったが女性から誘われると、悪い気はせんだつた」

次郎は朝食時までにボソツと言った。

「それはよーございましたね」

と立ち上がり、まりは食器を大きな音と共にかたづけ始めた。次郎はまりの手前気が引けんのか小声で、ボソボソと昨夜の出来事を話始めた。

「お金を使っただけでは無かったんじゃーないでしょ、収穫はあった」

地検秘書室長の村井瑠璃子は、仕事は人一倍出来るがその分淋しがり屋だ、秘書室の激務を酒と男で紛らわせている、小生はそう想った。銃殺された菊田健斗さんの奥方、地検勤務の理沙に探ってもらっている。近日中に探り情報が入って来る、それが出てから今後の捜査方針を決める」

「理沙ちゃんでも誰も同じ、既に二人死んでいる危ない事は止めて下さい。

言い訳はせんが理沙は健斗の仇討、協力させてくれと言って来た、また降りるのは何時でも構わん、言ってくれと申し伝えてある」

まりは・・・。

ポケットでルパン三世が喚いた。府中交通課の稲垣巡查長からだ。

「次郎さんおはようございます、ご無沙汰ばかりで」

「こっちこそご無沙汰しています」

「今日空いているかな一時間もしないうちに着けると思うよ」

「空いてるよ待っている」

「オッス」と言っただけでガキさんが入って来た。

「昨年、次郎さんが行方知らずの時、まりさんやチームいっぷくのお嬢さん

方に会いに良く来ていたよ、次郎さんより親しくなったよ」

「ようござんしたね」

二人はそんな会話を楽しんでいる。

「ところで次郎さん、前にも言ったと思うが姪っ子が、釧路空港でG Aをやっている」と

「うー何時だったか聞いたことあるな」

「そのG Aがチョーが付くほどの推理小説キチガイ、中でも西村京太郎の大ファン、こないだなんか小説に沿って乗り物を乗り継ぎ、殺人現場へ行ってしまう始末」

「中々楽しみ溢れている娘さんでは」

「親からも再三連絡が入った、推理小説を忘れ空港業務に徹しろ、そう言ってくれと」

それを聞いていた次郎は

「若い人にだめだ、いけませんでは逆効果では、空港業務を熟しているんだ、そつとして置いたら」

「次郎さんがそう言うんならそつとしておくか」

「所でガキさん何か用事があって電話してきたんでは」

「お・そうだ忘れるところだったよ、このまま切るとこだった、話はほかでもない釧路の毒殺事件の件だ。」

「他の空港はどうなっているかは不明だが、釧路空港は、操縦士や整備士、C AにG A、それに掃除に至る専門の食堂はない、その日により好みの食べ物で店は別になる、が早い話が皆同じ店で食す。前置きはこの位にして本題

に入ろう。

洋食店で働く、仲のいい楓ちゃんとソバ店で一緒になった」

「洋食店じゃー賄いが出るのでは」

「賄いに飽きた頃に、こうして他店で食すようで、その日もソバ店でばったり、互いにあらーと挨拶」

向き合い座った。

「今日はさっぱりザルそばで行きます」

とレナちゃんが言う。

「私もそれでいきます」とヒマも言う。

二人はザルそばが出来てくるまでの時間、この前、モデルさんみたいな人が来たよと雑談を始めた。

「本物のモデルかタレントでは」

「でもそうだとしたらマネージャーか付き人が一緒では」

「居なかったな、支払いは本人がしたし」

「だったら所謂普通のアラフォー女性」

「アラフォーで背丈はどの位だった」

「170CMはあったかな、スラっとしてミニのタイトスカートを履いていた、髪は長めで三方に流し、薄目な化粧成で紅は真っ赤で香水はきつめ」「その香水のきつめな女性、私が会った人と同じでは」

とヒマが言った。搭乗の案内をしていると、順番待ちをしていたその女性に目が留まった、背は高くすらっとしモデルさんのようだった、ただ必要以上の香水には閉口してしまう。レナの方の情報は」

「変な趣味とは言わんというて、中堅どこのお笑いコンビが到着し、レストランに寄った時、煙草を二本吸い食後ティッシュを使った、ポケットからはがき大の紙屑を取り出した、それらと一緒にテーブル上の大きめな灰皿に捨てた。それらを集めるのが私のコレクション、今も私の秘密の箱に、他の人と一緒に保管してあります。ヒマだから、言うの、公表はタブーです」「姪っ子からそんな事を聞かされた時、三月二十九日と言えば、釧路空港駐車場で毒殺事件があった日、そんな日を思い出す、聞いている次郎の目が大きくなった。姪っ子さんにそれらは毒殺事件に関連していると思われる、その子に直ぐ警察に提出する様にと言ったんだ。次郎さん、そうしたら何と返って来たと思う、そんな大切な証拠品ならばいくらで引き取ってくれるかな、高額間違いなしと来やがった、次郎さんから姪っ子に提出するように、説得してはくれまいか」

「容姿から言うると秘書室長の村井瑠璃子似だ、銃殺された健斗さんは秘書室勤務で関りは如何になんだが」

「小生はレナさんのコレクションにとにかく言わない、だがガキさんここで言えるのは、村井瑠璃子は函館でも釧路でも確認が取れていない、この灰皿の品々が彼女のものか、定かであれば二つの事件に進展が出てくる。小生としては提出を期待す」

「姪っ子に言ってみる、鬼刑事の次郎さんが会いたがっている、例の友達所有の吸い殻等を欲しがっていると、早速姪っ子に連絡してみる」

「提出が完了したら、姪っ子さんと友達に旨いもんでも食させてやって下さい」

「携帯は繋がらんし陽茉莉が捕まらん、そんなに大きな飛行場でないのに」
「ガキさん、コーヒーでも飲んでて、ヒマちゃんも忙しいんだよ直ぐに連絡してくるよ」

ガキさんはまりに慰められた、無言で出されたケーキでコーヒーを飲んでい
る。参拝帰りだろう、一組二組とお客さんが入って来た。まりはいらっしゃ
いと声を掛け、どうぞと窓側の席を進める、昼のお客様が始まった。次郎は
窓側の席をかたづけ、奥の隅に移動、ガキさんもそれに連れ移動を始めた。
ガキさんが来てから小一時間が経った、ポケットで訳の分からん着信音が鳴
った、姪っ子からだとかガキさんが携帯を開いた。

「おじさんこの忙しい時間帯に何の用」

些かむくれ気味に携帯からの声がした。

「おーそうかゴメン、かの有名な元伝説の名警部、次郎さんが姪っ子の陽茉
莉に、話がしたい話が聞きたいと言っている。そんな訳で取り急ぎ電話した
んだ許せ」

「次郎さんが私に、是非とも出たいが、遅延もあり出発が二便
が重なっている、地方空港では珍しく大騒ぎ状態、落ち付いたら電話すると
元名警部さんに伝えて」

と言って電話は切れた。

「ガキさんお昼です、次郎と一緒にこれでも食べてて」

とまりはサンドイッチに目玉焼きとハムに野菜を添えて、特性サンドをガ
キさんと次郎のテーブルに持って来た。ごっさんと言ひ食べ始める、食し終
えた頃、訳の分からん着信音がする。

「おーヒマか今、次郎さんと変わる」

と言い携帯を次郎に渡した。

「次郎です、初めましてお忙しい折、コール頂きましてありがとうございます」

「おじがお世話なりっぱなしのようで」

「小生こそお世話になりっぱなしです。早速なんですが本題に入らせて頂きます」

「元、名刑事さんのお手伝いでしたら何なりと仰せつけて下さい」

次郎はガキさんをちよつと見して、ヒマにしゃべりだした。

「陽茉莉君は大の推理小説ファンと聞いている。と言い出したところで本題だ。

「今、小生等は非道とも言える殺人犯を追っている。が敵もさるもの尻尾を出さん、友人でソバ店員のレナさんに協力要請をお願いしたい」

ヒマは電話口であれれーつと声をあげた、次郎が何を言い始めたかヒマは分かんない様だ。

「ヒマちゃんゴメンはつきり言わんで、ズバリ本題に入ってしまったと、構えられると思って、協道をから言い出したんだ」

「で、私達はどうすればいいの何を言えばいいの」

「ソバ店員のレナさんに三月二十九日にモデル風な女性から収集した、たばことチリ紙とはがき大の紙、を提出するように言っして下さい」

「次郎さん、それらをどうする気」

「ヒマさん、西村京太郎ファンなら見当がつくだろう。煙草は唾液からは血

液型が、テッシュも同じ、紙片からは指紋が、それらは犯人に繋がるかも、小生はそう睨んでいる。又情報提供料としてガキさんが、高級レストランへレナさんと二人、連れて行くと言っていた」

「キャッホー即決、レナに直ぐ連絡とる、それらをどうすればいいの」

「釧路警察の捜査一課、大滝修二警部が直ぐ取りに行くようにする。一階の食処ソバ店で待っていてくれ十分で着くと言っている」

ヒマは了解と言って電話を切った。以外と二人は気が弱いのか、おどおどとした状態だ、仲間の仲居さんが落ち着いたらと、お茶を出した。十分とかからん内に釧路所ですと、警察手帳をかざし、二人の警察官が入って来た、レナがこれですと厚紙箱に入った代物を警官に渡した。代わりに預かり書を置いて行く。ヒマとレナはフーツと深呼吸し、お茶を飲み干した。「東京のおじさんに一流何処の店で、フルコースを頼もうつと、くしゃみしているかな」

「でもヒマ、おじさん連れて行ってくれると思う、あれは私には宝だが早く言えばゴミだよ、それが高級レストランのフルコース、考えられる」

「大丈夫次郎さんが付いているんだから」

ヒマはそう言い切った。後日ヒマ等は札幌の、高級レストランのフルコースを嗜んでいた。

次郎は県警の検査結果を待望んでいる、ルパン三世が何時喚くかスマホを手に持ったままだ。久し振りに理沙がいつぶくに来た。

「次郎さん、まりさんおはようと声を掛け、窓際にいた次郎の向かいの席に座った。」

「まりさんコーヒーお願いします、それと加奈さんとのケーキもお願い」「コーヒー直ぐ淹れるからまってて」

まりとそんなやり取りをしている理沙を、見ていた次郎がボソツと言った。

「淋しさから出られたようだなと、理沙良い情報を持ってきたようだね」

「次郎、分かる顔に書いてある」

「顔にそんな事書いたら別嬪さんがだいなしや、小生を誰だと思ってんだ、ただの人だが次郎だ」

「次郎、そうだったねゴメン」

頃合いを見計らいまりが、ケーキとコーヒーを運んできた。

「理沙さん、次郎の言う事の半分位で行動してね、危ないと判断したらすぐ降りてね」

「まりさん心配しないでね、そんな時は直ぐ止めます」

まりは分かったか頷きながら厨房に戻った。理沙はケーキを食べ、コーヒーを二口飲み次郎に向き直った。次郎はPCを開き、打ち込み体制をとり理沙に言った。

「サアー話を聞こうか」

と言った。

「何からにしようかな、そうだ室長の履歴からがいこう、村井瑠璃子の故郷は岩手県の八戸市、漁師の家に生まれた、八戸高校を卒業すると東京の大学に入学した。その後行方知れずとなった、私の掴んだ情報では、私と同じようにセンター街で生活していた所を、渋谷の大屋隆雄に見つかり敷地内でアパート暮らし、アルバイト先はまちまちだが皆大学生だった。大屋隆雄は

法外な入居料は取らなかった。唯一と言えば私もそうだったが学業の成績確認はしっかりやっていた。卒業を迎えると成績優秀者は大屋隆雄の目の届く企業に就職斡旋していた。優秀者村井瑠璃子は東都地検へ送り込んだ。東都地検の職員になって三年目、横浜税関職員の岡村益男と結婚」

次郎は時には黒目を大きくし、理沙の話を掻い摘んで、P Cに打ち込んでいる。

「この三年間で男はもちろん、酒とたばこを覚えた。この頃から地検内で頭角を現し始め、検事正秘書室勤務となる。三十を過ぎたあたりから地検内では、何故か住所は一部の者しか分からない様になった、警備上の事と言っているが定かではない。三十半ば過ぎ、持ち前の計算力と行動力、素早い判断力で若くして秘書室長になった。その頃から検事正室に出入りも多くなった。村井瑠璃子が室長になってからは、一部を除いて仕事は勤務時間内に終わらせろ、秘書室は定時退庁が殆どと言う。退庁後の室長の行動は不明、分かってるのは高級クラブに良く出入りしている、男と飲み、仲良くなり、店を出て行くのは確認されている、が仕打ちが怖いのか皆口チャックだ」

次郎は質問するでもなく無言でP Cを叩いている。

「総務で調べてもらったんだが、三月二十八日と二十九日の二日間村井瑠璃子は休んでいる、この辺も銃殺事件と毒殺事件が被るのではないか、次郎さんどう」

「それだけ調べたなら怪しまれはしなかったか」

「信頼のおける同期の白幡星華さんと秘書課課の生稲五月が協力してくれた。まだあるがちよっと待って」

と言って喉が渴いたんだろう厨房のまりにコーヒーカップをかざした。

まりも心得たもん温めに淹れた。理沙はコーヒーを二口飲むと喋りだす。

「何処まで話したっけかな」

理沙は天井を見た。

「銃殺毒殺事件と被ると」

「あつそうだった、でねー次郎、秘書室内で薬物売買や大掛かりな国際取引もとか、ねー次郎、どっからともなく噂が、火の気のない所には煙は立たないよね」

と、キーボードを叩く次郎の黒目が大きくなりっぱなしだ。

「次郎、どうしたのそんなに目を大きくして」

次郎は我に返ったか首を左右に振り冷えきったコーヒーを飲んだ。

「その話の信憑性は」

次郎は聞いた。

「確かなることは現在、私には分からない、もう一つ次郎に言うておくね、大屋隆雄の違法建築、不動産売買に秘書室が関わっている、事実社長の大屋隆雄が度々来ている」

「理沙、情報をありがとう。もう既にリスクを超えている、後は小生等がやる、これ以上探りを入れるのは危険。、日々の業務を熟してくれ」

「次郎私はお払い箱なの、つまんないもつとやらせてよ」

「やってもらうのは小生等大助かりなんだが、健斗さんと同じように銃殺なんて、危険が迫っている平常勤務に徹してくれ、頼む」

次郎にしては珍しく手を合わせ平謝り。

まりもテーブルに来て雑談を始めた。

「ちゅわー、早乙女浩二が爽やかそのもので入って来た、いきなり次郎さんビックニュースと言い出す。」

「ちよつとカウンター手伝ってよ」

とまりが理沙を誘う。

「熟年グループ二組が入って来た、お冷をお持ちし注文取ってきて、お願い」

断われるかと想ったらハイと言い、熟年グループの所に行った。

「いらつしゅいませ何になさいますか」

理沙は慣れたもんだ。

「ブレンドにケーキですって、ケーキは端からでいいよね」

「理沙ちゃん慣れたつもんじゃないの、上手よ」

「学生時代にファミレスでアルバイトやっていたんで、自然と言葉が出てきちゃった」

忙しい時に頼のもうかな等々、まりと理沙の話が弾んだ。次郎と早乙女は距離を締め気味に、丸テーブルに肘を置いた。

「次郎さん、村井瑠璃子とデートしてきたよ」

「それは、よござんしたね」

「次郎さんの言う通り、酒と男を拒む事はないようだ。花金で地検出口で張っていた、19時過ぎに彼女は出て来た、さすが地検秘書室長だ、ちよつと短めなスカートだが、ビシツと決めていた。尾行が始まる、赤坂見附で地下鉄を降り四丁目方向に、とあるビの一階にあるにクラブに入った。直ぐ入っ

ては、感ずかれてはと思い二十分程時間を潰して俺も入った。許可ギリチョンだろう照明が、所々にスポットライトが高級感を誘う、ボックス席やソファ―席が点在する。奥がカウンター席になっていて、向かい壁際はボトルキープ棚となっている。女性もいるので客は三十人で満杯だろう。村井瑠璃子は多分高級酒だろロックでチビリチビリンとやっている。いきなり隣に行かず、三つ空けたトンボに腰を下ろした」

「どうして直ぐに隣に行かなかったんだ」

「次郎さん、俺にだって恥じらいと言うか、何だあいつは綺麗な女性を見ると直ぐ声を掛けるのか、そう思われてもしゃくだ、様子見をした」

「ウェイターさんにレミーマルタンのロックをお願いした。何を感じたか女性がチラ見、俺は何かなと想いながらレミーマルタンに口にした。女性は膝に手を置き抑え気味だがしよせん無理、動くたびに裾は上がってしまう。何時しか俺は断れてダメ元、隣宜しいでしょうかと声を掛けていた。「はい、空いていますよどうぞと来た」

「浩二、やったじゃないそんでどうなった」

「俺はてっきりここじゃーなくなつて、他のトンボが空いているじゃないかと言われると思った。それがすんなりと」

「で、どうなったんだい」

「宜しかったらご一緒に、とレミーマルタンのボトルをかざした、彼女はボトルをキープしていた。俺が水割りを注文した時、あれつとチラ見はその為だったか」

その後はと次郎は聞いた。

「私はアラフォーとでも言っておこうかな、名は村井瑠璃子ですと言い公務員です。それ以上は勘弁ね、あなたは」

「俺は早乙女浩二、三十五歳、独身貴族で競馬好き、万馬券が取れ、偶には高級感あふれる店にでもとここに来た。こんな自己紹介でいいかな、それでグラスカチンさせた。彼女、酒には強いようだがいつしか、グラスの中の償いだ酒が減らなくなった。スローテンポの曲が流れる、照明が暗くなった。

彼女は俺の腕を引っ張りフロアーに、俺は彼女がなすがままにした」

良いムードじゃん」と次郎がちやちを入れる。

「昔懐かしい曲だと思うやもしれないが、東京ナイトクラブが静かに流れた。照明が暗くなりペアが数組踊り始める、俺も彼女に連れられくつつき踊った」

次郎はうんうんっと聞き入る。

「彼女が耳元で囁いた、今晚宜しかったらお付き合い、してくれませんか無論大人の付き合いを」

「それでどうしたんだい」

「次郎さん聞くまでもないでしょ、彼女がカードで店の祓いを済ませ、なすがまま有名ホテルへ、今宵一夜だけのお付き合い、電話も住所の交換もしないし、再開の約束事もしない、互いの詮索もしない。ここの支払いが私に致します。あなたの条件はと聞いて来た」

「俺はそれでいいと答える。互いシャワーを浴びベットに、彼女はこの道のプロなのか、男の扱いが慣れているのか手慣れた仕草だった」

「東都地検勤務したての頃、結婚していたと聞いているが、その後の事は、

ただ独り者と言っているが、退庁後の彼女の行動は不明、退庁後彼女の後を付ける様な者もない。サイドビジネスとか男とデートしているとか、噂は立っているが詳細は不明、でオールナイトだったのか」

「組んず解れず、俺も嫌いではなかったので夜中過ぎまで、それで午前二時ごろ仲良くホテルを出、別のタクシーで帰宅した。先週の花金に行ってみたが彼女は現れなかった。次郎さん以上だが」

「薬物、銃、違法建築不動産取引は出なかった。でたのは酒と男と夜の営みだったか、だけど満更でもないな、退庁してから男と酒以外に何かがあると堪じた」

「ご苦労さんと一万円札を数枚浩二に渡した。」

次郎はチームいっぽくメンバーに連絡を入れた、メンバーたってマキとカナにケンジだけだ。明日午後三時コーヒーショップいっぽくに、集合と其々にラインした。厨房でまりが言った。

「急にそんなこと言ったって誰だって、都合もあるし無理に決まってるよ」

「無理かどうか待っててみな」

十分もしない内にルパン三世が喚いた。マキからだOK、続いてカナにケンジと続いた。

「どうして皆OKなの」

とまりが聞いた。

「ここんところの小生の動きで、察しがついていたんだ。もう来る頃だろう」と、まりはいつもの事と思ひも、ケガが無いようにとボソボソ、次郎は今何か言ったかとまりに言った。

「次郎、いよいよだね」

とマキがいう。

「いつもながら遊びではない」

とマキを一括す。

マキは、次郎ゴメンと言いコーヒーを嗜んだ。次郎は夜の部が始まる前に始めようと、数枚束ねたA四紙を皆に配った。

「ざっと説明する、狙いは北海道と八戸市、一週間後の六月二十日、まずはフェリーで苫小牧へ渡る、陸路で釧路に、屈沙羅湖、阿寒湖。旭川市から10k直線路を経由し函館に、八戸に渡り仕上げを行う。東北道をひたすら走りいっぷくに、日数は二週間を予定している」

マキが堪え気味に聞いていた、が耐え切れず、キャツホウと叫んでしまった。

「北海道旅行ではない、殺人事件の捜査だ、危険を伴うこともあり得る。そんな事を忘れんと行動してくれ、個人プレーはいかなる時にも許さん、交通機関は乗りなれたBMWとミニクーパーを利用する。尚、北海道まではフェリーを利用、経費、交通費等々小生持ちとす。それと現在持っている仕事は休まねばならない。

無理に休めとは言わん、業務上不可能であれば参加辞退も、誰がいるか」
間が空いたが引き続き次郎がしゃべり始めた。

「誰もいないようだな次に進む、道県警と青森県警は、小生の声が届かない所でもある、又そこに取材も多々と想う。マキにカナ、その恰好ではなく取材用のスーツを着用の事」

二人は顔を見合わせハ―イと意味深風な返事をした。

「支障を来す事も考えられる、今回の小生等の行動の多言はご法度、いいな」

マキの方を見て言った。そんな次郎を察していたかマキは膨れっ面、

「マキちゃん、コーヒーでも飲んで一息つきましよう」

と、まりがコーヒーを淹れて来た。

「ねー次郎、危険を多いと想う事実殺人事件も起きている、いくら腕っぷしのいい警部だったかもしれんが、警察手帳持たない、ピストルも持たない捜査です。危険はつきもの、その地区の美味しい食べ物や、名立たる温泉に浸かるのも必要だよ」

マキとカナは見合わせVサイン。

「いくつかの旅館は予約する事にし、フリーを多くしとく、気に入った地があればその都度、旅館を探せばいいだろう、最悪の場合一部屋ぐらいは取れるだろう」

マキがボソボソつと言った。

「その場合次郎達と相部屋」

「俺は構わんよ」とケンジが言った。

「マキ、小生等に寝顔が見られんのがそんな否かよ」

次郎がいう。

「そうじゃないが、まだうら若き乙女だもん」

「相分かった、そんな時は男達は狭いがミニで寝るとしよう」

そんなやり取りをしていたら、おはようございます。とノリが入って来た。

入ってくるなりノリは言った。

「チームいっぷくの重役会議ですか」

ときたまんだ。

「エッもうノリが来る時間になったか」

と次郎が言った。

「おっカナは初めてかなノリいやC Aの松下範子さんだ、ご主人は元ピース王国職員の翔平さん、事件に関与した犯人側に殺害された。早く事件を忘れるよう、乗務しながらも週一回、ここで歌ってもらっている。仕事柄お客様に好まれファンも多い、今やこの店には必要な人です。カナは知っているよな」

と次郎はノリに説いた。

「はい、存じ上げております。射撃の名手さんとか、ノリです宜しくと」手を差し伸べ挨拶した。

「こちらこそ宜しく」

とカナは手を握り返した。

「夕飯出来たよ食べよう」

とまりの声がした。誰ともなく皆がテーブルを囲めるように並べた。大皿に山と積まれたサンドに野菜の数々。サンドを取りながらノリはカナに尋ねた。

「以前、警視庁特捜隊の面々が自分の歌を聞きに来てくれました、その時隊員さんが言った。

「内にも女性で歌の上手な隊員がいました」

と言っていた、その歌の上手な元隊員さんでカナさんの事じゃない」
とノリは訪ねた。

一同、何の事やら皆キョトーン。

「ねねーさっき次郎さんが言とった、クロヒヨウってカナさんじゃないの、
隊員さんも言っていましたクロヒヨウとか、そうなんですよ」

返事にもたついているカナを見かねて、次郎は言った。

「歌が上手いかどうかは定かではないが、元警視庁特殊隊の寺島加奈に相違
なし、クロヒヨウ何も隠す事はない。今やチームいっぷくの重役の一人だ、
堂々と話すればいい」

ノリはカナのコップにジュースをつぎ宜しくと、コップをカチンさせた。何
故か二人は意気投合した。

「ねー次郎、今宵のライブSHOW十五分延長していいでしょ、カナさんもラ
イブSHOWに加わって頂きます。然るに時間が足りない、十五分延長して
いでしょ」

「小生はカナが歌えるかどうかは知らんぞ、レパートリーは聞いているのか」
「もう話は纏っている、今風は苦手だって、所謂、親父や爺さん時代の演歌
が得意だって、自分と同じ楽しみだよ」

まりもチームいっぷくのメンバーも乗り気だ。てな訳で今宵のライブSHOW
は十五分早く始まった。

「今晚は、時間は限られています但し今宵、いっぷくがお送りする歌の数々、
ごゆっくりとお過ごし下さい」

何時ものようにノリの名調子で始まった。

「正式には来月からですが、今宵は私共いっぷくに新しい友が来てくれました。紹介しよう寺島加奈さんです」

取り急ぎノリの衣装で出演となった。シャツはともかくスカート丈が合わん、チョウミニだ、そんなカナは拍手喝采、そんで♪上野発の夜行列車降りた時からと、始まったからサアー大変、おまけにモンローウオークだ、いっぷくは大騒ぎ。その後女無法松やら天城越え等々披露、ノリと交互に歌い最後は二人で好きになった人で締めくくった。若い人も当然なれど往年の警察官等は、婦警さんが大勢入店しているのも気にせず、来月からは毎週水曜日にコーヒー飲みに来るよと、口々に言い握手握手。皆は引き上げまりとノリとチームいっぷくのメンバーだけになった。

「次郎いよいよだね」

とノリが言った。

「否まだだ」とマキが言った。尚もマキは言う、

「外輪を埋めなければならぬ、一週間後北海道と八戸へ行ってくる、ノリの言ういよいよはそっから帰ってからだ」

黙ってマキの言を聞いている次郎は頷くだけ。日にちが変わりそうだ、今宵はこの位でと次郎は二階へ引き上げた。徐にのりが、

「北海道から戻るまでは皆さんに、会えない淋しさ百倍、そして危険百倍だけれど、皆笑顔と息災で帰って来てください、まりさんと待っています」

と言いノリから笑顔が消えた。

六月二十日火曜日15時30分、いっぷく裏駐車場に次郎とケンジにマキ、カナの四人は集まっている。次郎が言い出した、

「19時45分大洗発、苦小牧行きフェリーに乗船、苦小牧には翌日の13時30分到着、では出発しよう」

ミニクーパーとBMWに其々に分乗した。見送りはまりだけ、まりは何時ものように火打石をカチカチさせる。大泉インターから環状八号線に入った。三郷ジャンクションで常磐道に入る、友部で休憩し北関東自動車道で、大洗フェリーターミナル。マキとカナは得意のバージョンだったが、手を振ってくる程度で嫌がらせ等はなかった。乗船には早めに到着したので、近隣でガスチャージと夕食を済ました。

「北海道の会計はマキに全てを任せた、頼むぞ」

次郎はマキにカードと当初の現金を渡した。汗を流し、次郎達はラウンジで、流動食と共に寛いでいた、マキとカナは、明日からは重要捜査だと言うのに、リゾート寛ぎ気分、寸胴風なペアパンツにボディシャツ、次郎とケンジは否応なしに、乗船客からの視線は多い。頃合いを見、次郎は二人に言った。

「何時までも飲んでいても構わんが、体調は自分で管理しろ」
そう言って船室に戻った。